

# 総合的外国語運用能力を育成する YPU の取組み —「+ a」発信型プレゼン教材の作成と外国語学習会の活性化—

金 恵媛・森原 彩

## 1. はじめに

山口県立大学は2012年度「グローバル人材育成推進事業タイプB（特色型）」に採択され、「元気な地域は元気な国の基となり、地域のグローバル化は元気な地域を作るカギとなる」というスローガンのもと、5か年にわたるグローバル教育プロジェクトを実施中である。地域の課題解決に取り組み、地域の歴史的、文化的、自然的、人間的な資源の価値や可能性に着目し世界に発信できる「Inter-local人材」、すなわち世界と日本の地域の懸け橋となる人材を育成すべく後述の①～④の実践に取り組みながら教育内容の更なる充実化を図っている。Inter-local人材育成を促進するため、グローバル事業5か年の前半では国際文化学部の既存のカリキュラムに加え、①「域学共創学習プログラム」の展開、②「4技能+ a」総合的外国語運用能力の育成、③IPDポイント制度の導入、④「域学連携コンソーシアム」の設立を進めてきた。2015年度から段階的に導入される新カリキュラムにおいては①～④の内容を強化し、グローバル人材の育成に取り組んでいる。

本稿では言語教育プログラムの取り組みについて重点的に述べる。山口県立大学の言語教育プログラムが目指す「総合的外国語運用能力（4技能+ a）」とは各重点外国語（英語、中国語、韓国語）における4技能（「話す」「聞く」「書く」「読む」）に「a = 異文化コミュニケーション力」、すなわち異文化・自文化理解を土台にもつ内容表現、伝えたいことを発信できるプレゼンテーション力を強化した能力である。基礎的な語学技能とともに「異文化コミュニケーション力」を身につけ、留学先や卒業後の職場において即戦力として活躍できる言語運用能力の育成を目指している。また、語学学習は一朝一夕で力がつくものではなく、常日頃の積み重ねによって成り立つものであることから、学生の自主学習・自律学習の習慣化への支援が必要である。2013年度は、言語能力スタンダードの体系化とカリキュラムの改

善、LMSを活用した授業展開などICTを活用した授業と自学環境の基礎作りを行った（林・森原,2014<sup>1)</sup>）。2014年度は学生の自学の習慣化への支援を強化する取組みとして「外国語学習会」と「学習サポーター」活動の整備と活性化、多言語プレゼン教材の発行を重点事業として行った。以下、前記の2つの取組みと、言語教育プログラムの全体的な実施状況並びにCALL教室（通称LaLabo）の利用現状と課題について報告する。

## 2. LaLabo（ララボ）の活性化と課題

### 2.1 LaLaboの利用状況と課題

CALL教室LaLaboの利用現状がわかるデータとして2014年度の利用者数に注目すると、2013年度と比べ利用者総数は増えているものの、週平均の利用人数には大きな変化が見られなかった。これについては、大きく3つの要因が指摘できる。1つは、利用時期にばらつきがあることである。傾向として授業で課題が出される時期に利用が多い。2つめは放課後の利用が少ないことである。多くの学生が放課後の時間にサークル活動やアルバイトを入れていること、また、学外利用が定着しつつあることが背景として挙げられる。授業で利用するe-learningやLMSシステムは「学外からもアクセスできる」ことが周知され、空きコマや放課後よりも深夜など学生の都合や学習効果の上がる時間帯に自宅で利用することが多くなってきた。したがって授業外での自主学習時間での利用率は総体的に伸びが鈍い。3つめは授業でのLaLabo利用が大幅に増加したため、学生が利用できる開放時間が減少したからである。2013年度、特に後期の時間割では、複数の外国語の授業が同じ時間帯に割り振られていたため、授業でのCALL教室使用が困難な場合が多々あった（図1参照）。そのため、今年度は時間割を変更し、より多くのクラスで利用できるよう工夫した（図2参照）。さらに学生サポーターによって運営されて

いる外国語学習会で LaLabo を利用することも増えた。結果的に、自主学習室として利用できる時間枠は、週 25 コマのうち授業や学習会で使用する 17 コマを除く 8 コマ分しかない。授業を通して LaLabo 利用に慣れてもらうという取組みと学生が「空きコマを有効に活用する」学習スタイルへの支援が拮抗するかたちであり、今後検討が必要な部分である。

## 2.2 LaLabo 利用者の声：言語科目担当教員及び学生利用者からの意見

2014 年度後期初めに LaLabo 使用について関係教員からヒアリングを行った。結果としては、「ネットの使いやすいシステムなので、授業に必要な時にすぐ関連情報をリンクできて便利だ」「明確な目的をもった資料検索が習慣化しつつある印象を受ける。好きなサイトの検索だけでなく必要な情報を多様に収集する傾向が認められた」「自分で操作する部分が多いので学生が興味を抱きやすい」「学生の

目の前に画面が表示されるため、集中しやすい印象がある」など、肯定的な意見がある一方、「少人数のクラスは集中しにくい気がする」といった意見もあった。映像を見たり、音声を聞いたり、要約や自分の意見を述べたり、クラスメイトの意見にコメントする、あるいはメディアを活用するなど、学生自らが能動的に学習に取り組む仕掛けづくりをさらに支援していく必要があるという意見もあった。

一方の学生利用者の意見では、「画面を共有しながらペアやグループで話し合うなど、共同作業をするのが楽しい」、「ヘッドフォンを使って会話練習やアウトプットの練習をするので、普段あまり話さない人と話ができるのが画期的で楽しい」といった肯定的な意見が多かった。授業で LaLabo を利用し始めた 2013 年度前期には「使い方が分からない」「ログインするのが面倒くさい」などといった否定的な意見もあったが、2014 年度後期には半数以上が「抵抗感がなくなった」と答えている。

図 1 2013 年度 LaLabo 利用スケジュール (後期)

コマ		月	火	水	木	金	
1	8:40-10:10		①中国語Ⅱa ②中国語Ⅱb	①実践英語Ⅳ ②実践中国語Ⅳ ③実践韓国語Ⅳ	①中国語講読Ⅱ ②韓国語講読Ⅱ		
2	10:20-11:50	アカデミック英語Ⅱ	①実践英語Ⅱa ②実践中国語Ⅱ ③実践韓国語Ⅱ			ディベートⅡa	
昼休み	11:50-12:40						
3	12:50-14:20				アカデミック英語Ⅳ		
4	14:30-16:00	アカデミック英語Ⅳ	韓国語リスニングⅣ		韓国語Ⅱa	中国語リスニングⅡ	
5	16:10-17:40						
6	18:00-19:00	自主学習教室として開放					

図 2 2014 年度 LaLabo 利用スケジュール(後期)

コマ		月	火	水	木	金
1	8:40-10:10		韓国語Ⅱa	実践中国語Ⅳ	中国語講読Ⅱ	実践英語Ⅱa
2	10:20-11:50		実践韓国語Ⅳ	韓国語講読Ⅱ	ディベートⅡb	ディベートⅡa
昼休み	11:50-12:40					
3	12:50-14:20	実践中国語Ⅱ			アカデミック英語Ⅳ	
4	14:30-16:00	アカデミック英語Ⅳ	韓国語リスニングⅣ		中国語Ⅱa 中国語Ⅱb ※交代で使用	中国語リスニングⅡ
5	16:10-17:40			韓国語学習会 (学生主催)	実践韓国語Ⅱ	英語学習会 (学生主催)
6	18:00-19:00	自主学習教室として開放			中国語学習会 (学生主催)	自主学習教室として開放

### 3. 学習サポーター制度と外国語学習会の実施状況

言語教育において自主学習及びその習慣化が重要であることは改めて言うまでもない。本事業においても自主学習を促すための教育的支援に努めており、代表的な取組みとして「学習サポーター制度」と学習サポーターのメインの活動として定期的に開催されている外国語学習会が挙げられる。学習サポーターの主な活動としては2つ挙げられるが、1つは月曜日から金曜日の放課後、学生がLaLaboを利用する際の機材の使い方や学習のアドバイスなどの学習支援であり、もうひとつは外国語学習会である。どちらの活動も学生のLaLabo利用の増加を促すとともに自主学習の習慣化を具体的に支援する取組みといえる。

#### 3.1 学習サポーター制度

学習サポーター制度はCALL教室LaLabo(2012年度3月末設置)を使用した活動として同年5月より開始した。活動の目的は自主学習のサポートと同じ外国語を学ぶ学生間のコミュニティの形成・活性化にある。サポーターの募集、選考は学期ごとに実施し、メンバーは学部2～4年生、大学院生、留学生で構成されている。学習サポーターにはそれぞれ担当外国語があるので、応募条件として留学経験者であること、外国語能力が高いこと、さらに高い活動意欲を保持していることを求めている。外国語学習を通して後輩と先輩が切磋琢磨する学習コミュニティの定着と学生同士のネットワーク拡大を図るため、人数制限は特に設けず、応募のあった学生は基準を満たせば、採用することになっている。今年度は海外からの留学生と上級生(留学志望者・留学予定者)の増加がみられた(表1参照)。

表1 学習サポーターのメンバー構成

	人数	留学経験者	2～4年生 <sup>1)</sup>	留学生
2013年前期	12名	4名	5名	3名
2013年後期	13名	4名	6名	3名
2014年前期	23名	3名	15名	5名
2014年後期	23名	4名	11名	8名

<sup>1)</sup>次学期に留学派遣が決定している学生や各言語の検定試験などで高い成績を得た学生などが対象。

#### 3.2 学習サポーターの役割

学習サポーターの役割は、大きく3つ挙げられる。1つめは「教員と学生を結ぶ懸け橋になること」である。授業とは異なるアプローチの仕方や学生ならではの目線を生かした支援、自らも授業等で学習したことを伝える、という役割が期待されている。2つめは、「学習仲間・学習コミュニティをつくること」である。言語学習においては単語を覚えるなどの個人学習はもちろん重要であるが、座学だけではなく、実際に「使ってみる」ことが大事である。学習コミュニティを通して学習仲間と切磋琢磨しながら学習意欲を持続・向上できる相乗効果も期待できる。3つめは、「後輩学習者の身近なロールモデルになること」である。身近なところで憧れの存在を見出し、ロールモデルをもつことで学習への取組みが積極的になり、学習目標もより具体的に描くことができる。また、留学を目指す学生にとっては、経験者である上級生からの情報や意見は非常に参考になるもので

ある。今後も学習者にとって学習サポーターが身近なロールモデルとなり、刺激を与えてくれることを大いに期待している。以上の3つの役割とは別に、学習サポーター自身もさらなるレベルアップができることは改めて言うまでもないだろう。

#### 3.3 学習サポーターへの支援

学習サポーター自身の学びと外国語学習会の内容を充実させるため、学習サポーターのミーティングを学期中に3回実施している。それぞれの時期と内容は、学期初めに活動内容や学習サポーターの役割についてのオリエンテーション、学期の中間と期末に活動内容の報告や学習会の振り返りと課題発見のためのヒアリングを行う、というものである。また、各学習会の後には毎回サポーターが振り返りを行い、「良かった点」「改善すべき点」を記入する報告書の提出を義務付けている。さらに本学HPの国際文化学部からアクセスできるポータルサイト「グ

ローバルラウンジ<sup>ii</sup>」にも学習会の報告をアップしている。学習会は学習サポーターが主体となって企画・実施する活動であり、毎回の報告やサポーターミーティングは、各回の実施内容や振り返りを次の活動へ発展的に反映させていく、いわば学びのPDCA サイクルの構築・運用として有効である。

2014 年度後期からは、学習サポーターへの支援や学習会の内容を充実させるための新たな試みとして、全3回のワークショップを実施した（写真1～2）。ワークショップの目的は主に2つあり、1つめは学習サポーターが自らの活動内容を客観的に振り返り、他の学習サポーターとのピアレビューを通して学ぶことである。学習サポーターの役割につい

て再認識し、今後のサポーター活動に反映していく試みである。2つめは、担当言語の境界を越えてサポーター全体が一丸となって「学習コミュニティ」の構築・活性化を図るきっかけづくりである。学習会を企画・運営する上での問題点や課題は各言語のサポーターだけで個別に抱えてしまうのではなく、仲間同士でシェアすることで異なる見方ができたり、問題解決の糸口が見つかったりすることも少なくないようである。全3回のワークショップ実施概要は表2のとおりである。成果については、参加者が事後アンケートに記入した内容をもとにまとめたものを報告する。

表2 ワークショップの実施概要と成果

	実施日時	参加者	詳細
第1回	10/29 (水) 12:00 ~ 12:45	学習サポーター	<p>【目的】</p> <p>① 言語ごとに学習会の特徴があるため、どんな活動をしているのか、どんな工夫がされているのか、学生たちでシェアする。</p> <p>② それぞれの抱える課題について客観的に振り返り、解決策を探る機会を設ける。</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各学習会の良いところ・工夫・真似できそうなところをシェアすることで、担当学習会をより充実させるヒントが得られた。</li> <li>同じ気持ちで活動に取り組んでいる仲間と話し合いをすることで、相互のモチベーションが上がり、また課題についての解決策の手がかりもみつけた。</li> </ul>
第2回	11/19 (水) 14:30 ~ 16:00	学習サポーター  学習会参加者	<p>【目的】</p> <p>① 学習会参加者の声をサポーターが直に聞く機会を設ける。(ただし下級生が遠慮することを避けるため、担当していない学習会参加者の話を聞く)</p> <p>② 先輩・後輩・留学生との交流など学習会を通じたネットワークの意味と効果について参加者同士に再確認する。</p> <p>【成果】</p> <p>(学習会参加者側からの意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>普段参加している学習会以外のことを学べた。</li> <li>普段接しない学習サポーターと知り合うことができ、今後の学生同士のネットワークになる。</li> </ul> <p>(学習サポーター側の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>まだ改善点があるものの、自分たちのサポート活動がある程度成功していることが分かった。</li> <li>自分本位でなく、学習会の参加者のことを考えるべきだと気づいた。</li> <li>学習者の声を聞くことで、担当している学習会の計画を見直してみたいと思った。</li> </ul>
第3回	12/3 (水) 13:00 ~ 15:00	学習サポーター	<p>【目的】</p> <p>① 前2回のワークショップでの意見をふまえ、改めて学習サポーターの役割、「学習コミュニティ」について考える。</p> <p>② 各学習会について追加報告をし、新たな課題をシェアし、解決策を考える機会を設ける。</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サポーターが思い描く「学習コミュニティ」について意見交換することで、互いの考えや認識の違いを理解できた。</li> <li>それぞれの担当学習会の雰囲気づくりや内容の充実化に向けてモチベーションが上がった。</li> <li>サポーターの努力や取組みが自分本位にならないように、参加者の立場から活動内容を考える必要性を実感した。</li> </ul>



写真1 学習サポーター ワークショップの様子



写真2 グループでの話し合いの様子

### 3.4 外国語学習会の企画・運営

外国語学習会は上級生・留学生で構成される学習サポーターによって企画・運営されるものであり、2013年度後期(10月)より本格的に活動を開始した。以下に各言語別学習会の実施時間(表3)、主な活動内容(表4)を示した。内容については、参加者のニーズや検定前対策などによって変更が行われる

場合もある。2014年度の前期終了後に、学習会参加者に学習会利用に関するアンケートを実施したところ、「学習会の内容が分からないと参加しにくい」という声があったため、今年度後期からは月ごとの予定を明記したポスターで学習会を周知するように工夫した。また、学習サポーター自らが各言語の授業に赴き、学習会のPRをしている。

表3 外国語学習会の活動時間

	英語	韓国語	中国語	スペイン語
2013年後期	English Lunch 学習会 (1時間/週)	コリアンランチ 学習会 (1.5時間/週)	学習会 (1.5時間/週)	
2014年前期	学習会 (1.5時間/週)	コリアンランチ 学習会 (1.5時間/週)	学習会 (1時間/週)	学習会 (1.5時間/週)
2014年後期	学習会 (1.5時間/週)	コリアンランチ 学習会 (1.5時間/週)	ランチ 学習会 (1時間/週)	学習会 (1.5時間/週)

※1.5時間は本学の1コマ分

表4 外国語学習会の活動内容

学習会	主な活動内容
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>English Lunch: 昼休みに食堂で行う。英語圏からの交換留学生とともにランチを食べながら会話を楽しむ</li> <li>学習会: LaLaboにて映画や音楽鑑賞を通して文化に触れるとともに、新しい単語やフレーズ(英語に苦手意識を持っていた学生にも好評)を練習する</li> </ul>
韓国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>コリアンランチ: 昼休みに教室で行う。韓国語圏からの留学生とともにランチを食べながら会話を楽しむ</li> <li>学習会                             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 検定対策: 過去問、検定問題に出題されやすい表現学習</li> <li>➢ 発音や会話練習</li> <li>➢ K-Pop 音楽を活用した学習</li> <li>➢ スカイプで韓国に留学している上級生や韓国からの留学生と韓国語で質疑応答</li> <li>➢ 「料理教室」と題し、韓国料理をつくりながら、材料や作り方の韓国語学習</li> </ul> </li> </ul>

中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学習会             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 検定対策：過去問、検定問題に出題されやすい表現学習</li> <li>➢ 「家族」「学校生活」「休日の過ごし方」など身近なトピックについて質問しあう会話練習</li> <li>➢ 単語カードにて発音練習</li> </ul> </li> </ul>
スペイン語	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学習会             <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 「家族」「学校生活」「休日の過ごし方」など身近なトピックについて質問しあう会話練習</li> <li>➢ 単語カードにて発音練習</li> </ul> </li> </ul>

### 3.5 外国語学習会に関する調査の概要と結果

2014 年度後期に外国語学習会に関する質問紙調査を実施した。調査概要を簡単にまとめると次の表 5 の通りである。

表 5 外国語学習会に関する調査概要

実施時期	2014 年 11 月～ 12 月
調査方法	外国語授業の授業終わりに実施。質問紙を配布し記入を依頼。任意かつ無記名。
有効回答数	学年別：1 年生 34 名、2 年生 21 名、3 年生 27 名、4 年生 8 名 言語別：英語 49 名、韓国語 15 名、中国語 11 名、(韓国語・英語 2 名、中国語・英語 5 名 <sup>iii)</sup> )
質問項目	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. (全体対象) 外国語学習会を知っているかどうか</li> <li>2. 「知っている」と回答した人：学習会の参加経験の有無、参加頻度、気づき</li> <li>3. 「知らない」と回答した人：参加しない理由、機会があれば参加したいかどうか</li> <li>4. (全体対象) どうしたら参加しやすくなるか、やってほしいことなどの要望</li> </ol>

回答者の学年別割合としては 1 年生 38%、2 年生 23%、3 年生 30%、4 年生 9%で (図 3) である。選択言語別割合は、英語 60%、韓国語 18%、中国語 13% (図 4) である。

図 3 回答者の学年別割合

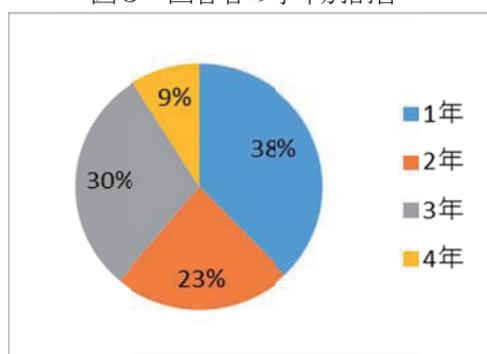
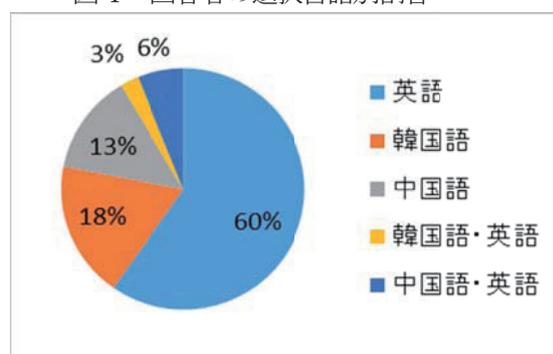


図 4 回答者の選択言語別割合



外国語学習会の認知度についてみると、回答者の 88%が「知っている」という結果である (図 5)。これを学年別にみると 1 年生が 94%、2 年生が 100%と低学年における認知度が非常に高い一方、3、4 年生では約半数のレベルに止まっており、上級生への周知が課題であることが見えてきた (図 6)。

図5 学習会認知度 (全体)

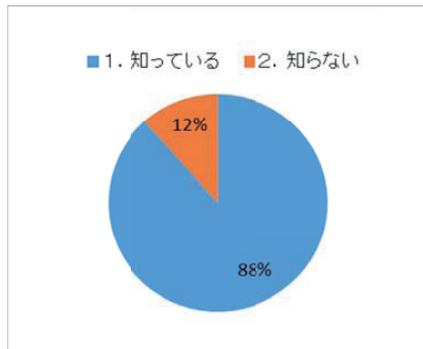
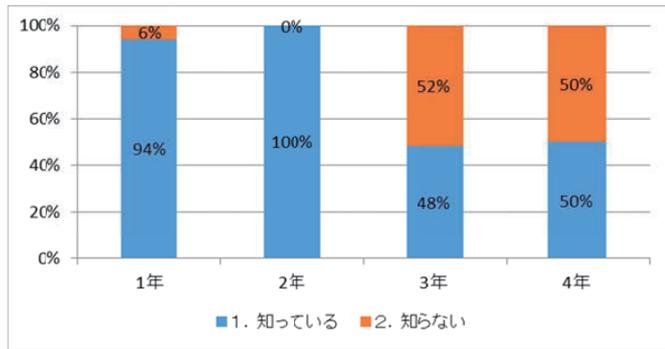


図6 学習会認知度 (学年別の割合)



次に「学習会を知っている」と回答した人のみ、学習会への参加経験の有無を尋ねたところ、半数以上が「参加したことがある」と回答した(図7)。学年別の内訳をみると、1年生と4年生の参加率が相対的に高いことが分かる(図8)。1年生の参加率が高い理由としては、授業でも学習会への参加を呼びかけていることと言語検定試験の前に学習会にて検定対策をしていることが背景として挙げ

られる。なかでも、大学に入ってから初めて学ぶ外国語である韓国語、中国語の検定試験対策のために学習会に参加している学生が1年生に多いと考えられる。4年生で参加経験のある学生は全員が現在学習サポーターとして活動しており、元来学習会に興味があったことがうかがえる。中級学習者である2、3年生の参加率が低いことが今後の課題として浮き彫りとなった。

図7 参加経験の有無 (「学習会を知っている人のみ回答)

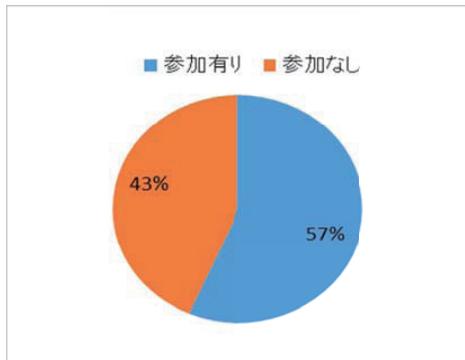
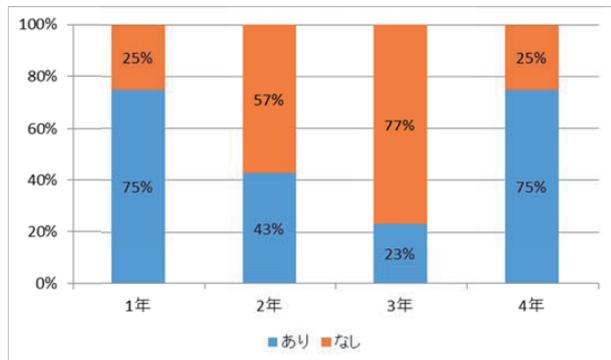


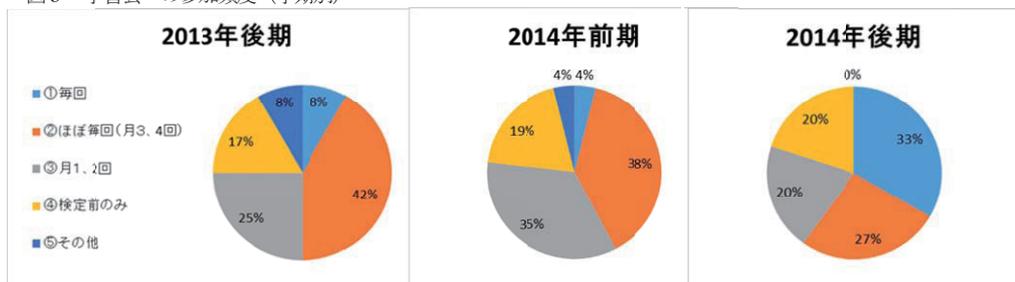
図8 学習会参加経験の有無 (学年別の割合)



学習会への参加頻度を2013年度後期と1年後の2014年度後期で比べてみると「毎回参加する」学生の割合が大幅に増えている(図9)。「ほぼ毎回」まで合わせると増加幅はさらに大きくなり、学習会

の定着がうかがえる結果といえる。また、「検定前のみ」学習会に参加する学生の割合が常に20%程度を占めていることから、参加者に検定対策ニーズが高いことは明らかである。

図9 学習会への参加頻度 (学期別)



一方、学習会に参加したことがない学生の「参加しない理由」を直近の2014年度後期の調査結果からみると、「時間があわない・時間がない」が半数に達し、続いて「内容がよく分からない」が25%と高率である。その他の意見としては、「1年のころに参加したから」「興味がない」「途中参加ができるか分からない」「効果が期待できない」「面倒くさい」「積極性がない（自分自身）」などがあつた（図10）。

「今後、機会があれば学習会に参加したいと思うか」という問いに対しては、半数以上の87%が「思う」と回答したことから、「参加したい」という意欲は高いものの、参加する条件があわない場合が多いと判断される（図11）。「時間があわない」「時間

がない」という意見に対しては、学年や学科によって必修科目の授業時間が異なるため、学習会対象者がある程度確定した段階でも開催時間の調整を図るなど柔軟に対応していく必要がある。「効果が期待できない」という意見に関しては、参加者の学習目的と学習会の内容のマッチングをよりていねいに図っていく必要がある。また、現在、月別に学習会の予定を明記したポスターの掲示、ホームページ上で、各学習会の報告書を公開しているにも関わらず、25%が「内容がよく分からない」と回答しており、学習会の情報が学生まで届きにくいことが分かった。今後は現在行っているものにプラスして、SNSを活用する、説明会の回数を増やすなど伝わる情報提供へのさらなる工夫を行いたい。

図10 参加しない理由(内訳)

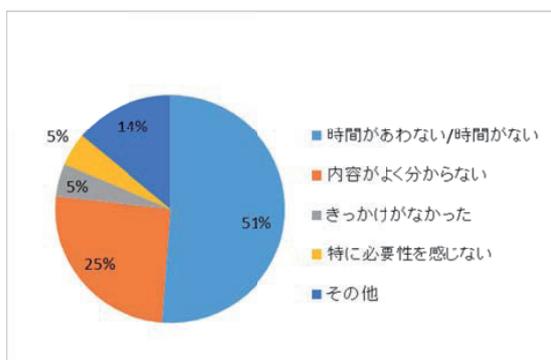
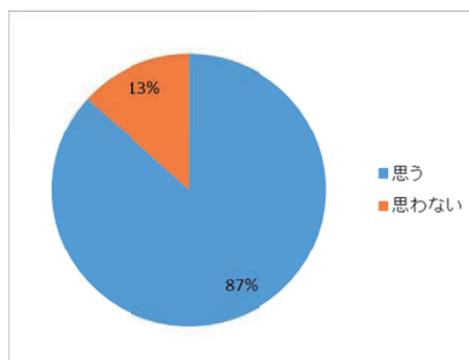


図11 学習会への参加意欲(参加経験無のみ回答)

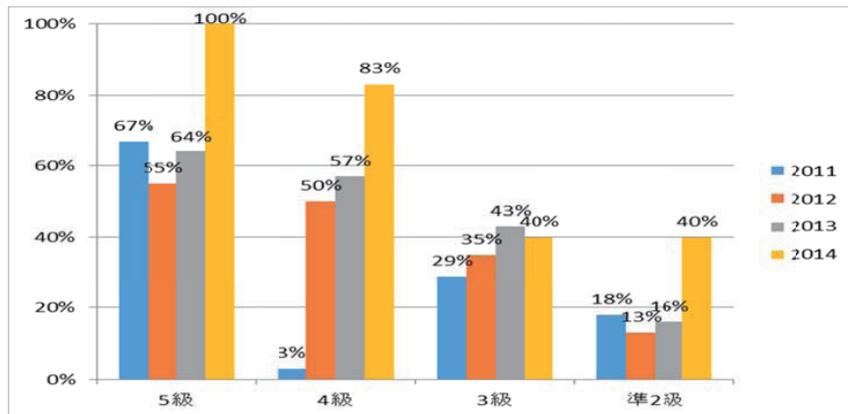


### 3.6 外国語学習会の成果と課題

2014年度に外国語学習会の課題として、①参加者数の拡大、②学習会参加対象を明確にする、③学習会の日程調整（学部全体のスケジュールとマッチングさせる）が挙げられていた。参加者数の拡大については、まだ十分とはいえないが、漸増傾向が確認できた。学習会参加対象を明確にし、授業と学習会の日時設定がうまくマッチングできた韓国語学習会においては、1年生から検定受験を促し、結果に結びつけることができた（図12）。韓国語・中国語の場合、国際文化学科の重点外国語として選択必修科目の位置づけとなっている。大学からの初修

外国語である学生が多いことから検定前には当該言語の学習会において検定対策学習を行うことにしている。韓国語学習会の参加者の場合は、2013年度は毎週10名弱であったが、2014年度現在は毎週20名弱に倍増している。学習会参加者の増加とともに「ハングル能力検定試験」の合格率の上昇がみられたことは、参加者の学習ニーズと学習会内容がマッチングした取組み成果として評価できよう。このように外国語学習の初級者向けの支援の土台はある程度整備できた。今後の課題として、上級生の言語学習の持続と中級以上の受験者向けの学習フォロー強化について検討する必要がある。

図12 「ハングル能力検定試験」合格率の受験級別推移 (2011～2014年)



また、学習サポーター制度についても、①学習会及び学習サポーターの質の向上、②学習サポーターの支援強化が課題であり、すでに述べたように、今年度は3回にわたるワークショップを実施した。学習サポーターの役割、現在実施している学習会の現状把握、問題状況や成果と向き合うことができ、改善の方向性や今後の課題について考える機会として有効であった。

#### 4. 『+ a : 多言語プレゼンテーション』の作成

##### 4.1 言語4技能の能動的な活用とプレゼンテーション

2014年度重点プロジェクトとして4言語（英語、韓国語、中国語、日本語）によるプレゼンテーション教材『+ a : 多言語プレゼンテーション』を作成した。グローバル社会を牽引する Inter-local 人材に求められる語学力として目標設定された「学術的思考力と表現力を身につけた総合的な言語運用能力」の向上を支援するねらいがある<sup>iv</sup>。したがって外国語運用能力「4技能 + a」のうち「a」を第5技能レベルまで引き上げた、「異文化コミュニケーション力」の育成に重点をおいた作りといえる。職場や留学先など、学習した外国語が使用される異文化共生の現場において相手との対話、理解を深めていく態度、コンテンツの強化に力点を置いた内容構成となっている。

日本における外国語教育は「読む」「書く」という文章力から「聞く」「話す」の会話力へと中心を移動し、さらに近年では議論できるコンテンツをもった会話能力の育成へとパラダイム転換が試みられている。高等学校の英語教育を例にみると「グロー

バル化に対応した新たな英語教育の在り方」として「言語活動を高度化（発表、討論、交渉等）」計画が示されているが<sup>v</sup>、大学での英語・外国語教育についても同様の言語活動が期待されよう。相手を意識した実践的な会話能力、言い換えると、自己主張に止まらず相手の意図や会話の場面に対応でき、さらには抽象的なイシューにも適切な外国語で表現できる能力である。

外国語の上達のためには学習習慣の自律性と持続性が求められる。国際文化学部の学生の自主学習の習慣化を支援するため自学支援教材（ディクテーション、発声練習、シャドウイング練習、語学検定対策用の e-learning 教材等）がすでに作成・活用されている。『+ a : 多言語プレゼンテーション』は外国語のさらなるアクティブラーニングを支援する学習媒体として位置付けられる。2015年度より段階的に実施される国際文化学科の新カリキュラムでは3年次対象の科目として「プレゼンテーション韓国語」「プレゼンテーション中国語」が新設された。国際文化学科の学生が卒業するまでに最低限必要とされる能力（ディプロマ・ポリシー（DP）：学位授与の方針）の観点から実践的な外国語学習を勧め、その一貫としてのプレゼンテーション学習への支援強化が取組まれているのである。DP、すなわち学習の出口の一つとして「グローバルな言語状況に適応し、文化の壁を越えて情報を集め、新たな形に構築し発信する技術」を身につけることを掲げ、それを実践する学習としてプレゼンテーションによる韓国語、中国語科目を配置している。

#### 4.2 『+ a：多言語プレゼンテーション』の構成と特長

テキストの構成をみていくと、まず第1部「プレゼンのツボ」では戦略的なプレゼンテーション方法についてまとめた。発表テーマに関する聞き手の関心や知識、プレゼンテーションのストーリー構成や図表の使い方、発表が行われる場所の特徴や使用媒体など、発表の入口から出口までの全過程を総体的に捉えたプレゼンテーションの型について学ぶ。

次に、多様なテーマについて考えるきっかけづくりとなる紙面構成を心掛けた。何かを学ぶ、さらに自主的に続けるといった学習やその習慣化の原動力は学習ニーズと楽しさに集約されるだろう。日常で使われることの少ない外国語・異文化との対話となるとなおさらである。つまり外国語によるプレゼンテーション学習にはその必要性の自覚と楽しく続けるための工夫が必要となる。そのため『+ a：多言語プレゼンテーション』には学習者が異文化理解を深めるなかで外国語表現を「楽習」できるコンテンツを第2部「プレゼン道場」においた。国際文化学

科の重点外国語である英語、韓国語、中国語の授業担当者全員が参画し、「日本の鬼、中国の鬼」「日本の常識、世界の常識」「Expo 2013 in Japan?」「中国の京劇芸術」「英語で日本文化を勉強する」など地域の固有性への着目と、「外国語のすすめ」「人間と社会」「インターテクスチュアリティ」「グローバルを実践する知恵」など文化背景にある普遍性を考えるトピックを提示した。

巻末にはプレゼンテーション効果の最適化を図るうえで必要な各言語の言い回しや決まり文句を、プレゼンテーションの場面別に示した第3部「プレゼンのための便利表現」をおいた。プレゼンの導入部分での自己紹介やプレゼン目的の説明、図表や調査結果の解説、メッセージの伝達と説得、結びにおける挨拶表現など、プレゼンの流れに沿って提示している。加えて「プレゼンのための便利表現」についてはネイティブによる音声ファイルを作成し、発音練習に活用できるようにした。

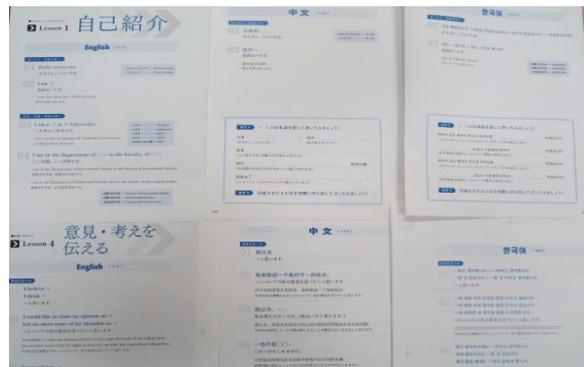
表5 第2部「プレゼン道場」の基本構成

1頁	異文化コミュニケーションに関するエッセイ
2頁	エッセイのキーワードを含む「語彙リスト」(4言語)
3頁	「考えてみよう!」: テーマエッセイのサブ課題への探究
4頁	「自分の意見をまとめてみよう!」: 学習者の探究開始(テーマ立て、説明資料作成、トピック及びキーワードの決定)
5~6頁	「自分の意見を発表しよう!」: 日本語・学習外国語によるプレゼン原稿の作成と発表

「プレゼン道場」は原則として2回の授業で学ぶことを想定した上記の6頁構成となっている(表5)。グローバル、外国語学習、自文化理解、Inter-localをテーマとする短い文章を読み解き、そこから、他者に伝える・説得する方法について具体的に練習する、実際の学習場面を想定したワークブック的な内容構成となっている。第1回目の授業は提示されたトピックを利用してプレゼンの「型」を学ぶ「ホップ」段階に該当する。2回目の授業は1回目に学んだ関連表現やプレゼンテーションの「型」を生かして類似テーマでのプレゼンテーションを行う「ステップ」である。円滑な対話を成り立たせるコ

ンテンツへの探究と発信を行うトレーニングを重ねるなかで「自分の好きなことを外国語で伝える」「他者の興味関心に目を向ける」「相手を理解するために自分の世界をふり返る」「自分の話を相手の興味関心や理解を得やすい順番でメッセージ化する」など、インタラクティブな刺激と対応に慣れていく。外国語プレゼンテーションへの習熟とともに学内外のスピーチ大会等に挑戦する「ジャンプ」を期待したい。自分や相手を観察する複数の窓を持つ、いわば異文化への「どこでもドア」を具体的なかたちにしていく練習といえる。(写真3、4参照)。

写真3 「プレゼン道場」(第2部)の例 写真4 「プレゼンのための便利表現」(第3部)の例



## 5. まとめ

以上、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業言語チームの2014年度の重点事業を述べた。LaLabo教室を能動的に活用した自主学習の習慣化のための取り組みとしての「外国語学習会の活性化」、「多言語プレゼンテーション教材の作成」が主な活動であった。LaLabo教室の設備基盤の整備、授業や自主学習で利用しやすい仕組みづくりが一定水準達成できた。外国語学習会については参画者の意見を集約して制度の活性化を図ってきた。具体的には学習サポーター及び学習会参加者を対象に質問紙調査及びワークショップを開催し、学習会を総体的に捉えるとともに今後の課題を明確にできた。途中経過の段階ではあるが、学習サポーターが活動のPDCAを重ねることによって学習会をより能動的に参画していく変化が観察できた。また参加者のニーズにフォーカスを当てた活動内容や日程の調整によって実際の参加率が上昇するとともに、学習の成果が検定受験率・合格率の向上をもたらしていることも確認できた。

外国語科目担当者のチームワークによって作られる多言語プレゼン教材『+α:多言語プレゼンテーション』は、2015年1月のワークショップ・言語科目担当者FD、授業での試用結果を反映して同3月に発行される運びとなった。実践的に外国語を「楽習」する、「異文化コミュニケーション力」を培っていく重要な基盤ができたと評価できる。4言語によるプレゼン教材を活用した異文化への深い理解、メッセージを伝える語学力・説得力のあるプレゼンテーション方法を獲得するトレーニングは2015年度から各執筆者の授業において展開されていく。地域の固有性、グローバル社会の普遍性をつなぐ相乗効果を創造、高めていく入口として活用されたい。

金 恵媛 (きむ へうおん)

専門：地域文化研究

所属：山口県立大学国際文化学部 (教授)

hwkim@fis.ypu.jp

森原 彩 (もりはら あや)

専門：英語教授法 (TESOL)、外国語教育

所属：山口県立大学グローバル人材育成推進事業

言語演習コーディネーター (助教)

amorihara@yamaguchi-pu.ac.jp

- i 林炫情・森原彩 (2014) 『『4技能+α』総合的外国語運用能力の育成を目指して』『山口県立大学学術情報 (国際文化学部紀要)』(7) : 105-116
- ii 公立大学法人山口県立大学 HP 国際文化学部ポータルサイトで2014年12月現在は学部教員と学部生のみ公開している <http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/gakubu/ic/kokubuntop.html> (2014年12月18日 最終閲覧)
- iii 1年生においては韓国語か中国語が選択必修科目であるため、選択言語は2つである。
- iv 公立大学法人山口県立大学 HP 「グローバル人材育成推進事業」 <http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/sinka/global-program.html> (2014年12月18日 最終閲覧)
- v 外国語教育の方針がうかがえる英語教育の事例として「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013年12月13日公表)が注目される。 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/134370\\_4\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/134370_4_01.pdf) (2014年12月18日 最終閲覧)

## Creating a Textbook for Presentations in Foreign Languages, “+ a”, and Activating Foreign Language Student-Oriented Study Groups - Foreign Language Program at Yamaguchi Prefectural University Aiming to Cultivate High Level Foreign Language Proficiency-

KIM, Hyeweon MORIHARA, Aya

Since 2012, the Faculty of Intercultural Studies at Yamaguchi Prefectural University has been implementing “The Project for Promotion of Global Human Resource Development”, a project funded by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. The ideal Global Human Resource we are cultivating is “Inter-local Human Resource” who is able to link people and communities world-wide to solve the challenges they face. In order to develop “Inter-local Human Resource”, the Faculty of Intercultural Studies has developed an education system with four main features, 1) “YPU at Home and Abroad Program”, 2) “Four-Skills + a”, 3) “Initial Professional Development-IPD Point System”, and 4) “YPU Future Consortium”. In addition, we will reinforce the education program even more with the new curriculum in the next academic year.

This paper describes one of the main features above, the foreign language education program in the Faculty of Intercultural Studies at Yamaguchi Prefectural University and the progress for the 2014 academic year.

The foreign language program aims to develop “Four-Skills + a” which means acquiring not only four skills, speaking, listening, writing and reading, but also communication skills including presentation skills to express own opinions as “+ a”. In addition to “Four-Skills + a”, the students’ autonomy learning and independent study are considered as an important factor for our foreign language learning. For the 2013 academic year, the foreign language program has focused more on the equipment and the environment; for example, establishing the YPU’s common foreign language standard that fits in all foreign language curriculums, English, Korean and Chinese, and improving the learning environment by incorporating CALL into foreign language classes with the usage of LMS and e-learning materials.

For the 2014 academic year, the foreign language program puts more importance on “learners”; fostering student learning leaders called “Learning Supporters”, activating students-oriented study groups, and creating a textbook for preparing presentations in foreign languages. It will also report the overall progress on the foreign language program at YPU and the current usage and the future consideration of CALL, LaLabo.